

光文社 古典新訳 文庫

老人と海

ヘミングウェイ

小川高義訳



本PDFは『老人と海』（2014年9月光文社刊 本体600円＋税）「訳者あとがき」のサンプル版です。株式会社光文社の許可なく本ファイルを販売・改変することは著作権法違反となります。また、本ファイルのコピー・転載はご遠慮ください。

光文社

訳者あとがき

すでに言いたいことは「解説」に書いてしまったが、あと一つだけ、とくに言いたいことを追加する。

海の上の老人は、敵にも味方にも、また自分自身にも話しかける。実際に声に出していることが明示される場合もあるが、そうでない場合もある。ともかく海に出てしまえば他の登場人物はいなくなるのだから、老人が一人芝居として演じきらなければ話は続かない。

一応は三人称の小説なので、「彼は〜」「老人は〜」というように語られるのが基本だが、じつは老人の心の中に入り込んで一人称に近い語り口調になることが多い。それ自体は日本語にとって難しいことではなく、純然たる三人称小説を訳すよりも、こっちのほうで翻訳者にとってはありがたいくらいだが、いずれにせよ老人が口に出したり出さなかつたりしながら考えることを、いかに読者に伝えるか、つまり老人の

話し方、セリフ回しをどうするか、ということが小説の印象を大きく左右する。

老人には独り言の癖がついている。これは自己との対話の一形式ということであまり大きな声ではないだろう。たしかに老人には「変わった年寄り」だという自意識があるが、この「変わった (strange)」という形容詞は、決して否定的な意味では使われていない。だが、もし老人が、生きている魚にも死んだ魚にも、この場にいらない少年に向けても、あるいは味付けに塩があつたらいいと思うだけでも、そのたびに大きな声で叫ぶような、へんな意味で変わったことをしたら、「老人と海」は、ただちに「変人と海」になる。

また、一人芝居とは言いながら、俳優が観客に向けて声を張るような芝居ではない。老人に叫ばせたら、そのような効果が出てしまう。つまり客席から老人を見るようになって、老人の内部からのモノローグとは視線の方向が逆転する。

あえて言うが、『老人と海』には、サンチャゴが声を張って語る場面はない。音楽にたとえれば、この楽譜には作曲家がフォルテと書いた箇所がない。従来の翻訳で、叫ぶ、どなる、わめく、大声で、声高に、などと書かれているのは、すべて訳者ごとの裁量でそうなっただけである。いわば演奏家が独自の判断で音量を上げていた。ど

ういう判断があつたのか私にはわからない。もともと演奏記号の少ない楽譜なのだから、演奏家によって判断が分かれるのは当然だとも言えるが、ある訳者が「どなた」と書いた箇所、別の訳者が「つぶやいた」と書くような事例があるのは、いささか奇異なことだろう。

老人の海上での思考には、①口に出している、②ただ考えている、③どちらかわからない、という三種類があつて、もし口に出す場合なら、そうと示す記号は一つだけすなわち *loud* という副詞である。厳密には、老人が自分の独り言について“*talking out loud*”だというセリフが一箇所あるが、あとはすべて“*he said aloud*”のように書かれている。

この二つ (*aloud* と *out loud*) は同義と思つてよい。これは「大声で (*loudly*)」とは違ふ。たしかに古い時代の *aloud* は「大声で」の意味だったが、現在では「ささやくのではない普通の声で」と解される。ヘミングウェイが生まれた十九世紀末の辞書でも新しい意味は出ている。ある二十世紀初頭の辞書には「やっと聞こえる程度からやかましい音声まで、意味の幅がある」という注釈が見られる。ウェブスター第二版と呼ばれる一九三四年の辞書は、まだ両方の意味を併記しながら、*out loud* について

は「普通の声」を優先させていた。ヘミングウェイが自殺した直後に刊行された第三版（一九六一）では、もはや「大声で」は古語と断定される。ただし少数派ながら古い意味を残している辞書もあり、また英和辞典には、かなり近年まで「大声で」のようない語が見受けられた。

単純にヘミングウェイの生没年からすれば、古い意味で使った可能性が絶対にはないとは言えないが、一つの参考としては、すでに「解説」でも引用した短篇「大きな二つの心臓の川」で、寡黙なニック・アダムズが初めて声を出すところに“speaking out loud”の例がある。この若者が大声を張り上げたと解釈する人はいないだろう。ほかの作品で aloud という語が使われた場合も——たとえばニックが奇妙な元ボクサーに出会う「拳闘家 (The Barber)」で、その男が声に出して六十秒を数える場面のよう——あまり大きな声は出ていないと思われる。ただし、aloud も out loud も、ヘミングウェイの文章で使われることは多くない。というよりも、めったにない。声を出すかどうかなどは、その場の状況だけでわかるのが普通だから、まず書かれる必要がない。

ところが『老人と海』では、out loud は一回だが、aloud は三十五回という異常な

までの出現率がある。おもしろい現象だとは思いますが、これだけ出ると小魚の群れのよ
うに追いにくい。すべて一律に処理するのは難しく、さりとて訳者が勝手に操作をし
てよいものではない。

これまで日本語で読める『老人と海』の事実上のスタンダードは、新潮文庫の福田
恆存訳だったろう。先人の業績に異を唱える不遜を承知で言えば、ほぼすべての
loudに「大声」「叫ぶ」「どなる」と繰り返した福田訳には、私は反対を表明したい。
また、かつて集英社の世界文学全集に収められた野崎孝訳は、「つぶやく」「口走る」
「声高」「大声」と幅があって、いわばダイナミックレンジが広いのだが、どのよう
に使い分けていたのか、その真意は測りがたい。

福田氏の場合は、ヘミングウェイが老人に対して「純粹に客観的な外面描写」を行
なったと考えているので（私にはそうは思えないが）、あえて老人を外側から見るよ
うに仕立てたのかもしれない。ただ、loudなしのsaidでも「どなった」ことにした
り、めずらしく原文に softly という演奏記号がつく箇所でも「大声」にしたりとい
うことで、ともかく徹底して老人に叫ばせる方針だったように見受けられる。

だが、「解説」でも述べたように、翻訳には訳者が話を作るといふ側面があるので、

それぞれ異なった仕上がりになっても不思議ではない。新規参入の私は、叫ばない老人の物語を提出する。もし新旧の比較をしてお読みくださることがあれば、そのあたりにも目を向けていただきたい。それに比べれば、海の用語をどう訳したかというようなことは小さな問題だと思うが、カツオノエボシ、ホンダワラなど、あまりにも日本語になりすぎる名称は避けた。舟の *boat* を「係柱」と書くこともしていない。ロープをつなぐ突起のことだが、ここで見慣れない専門用語を持ち出すと語感が合わないような気がした。

マノーリン少年は「じいさんは一人しかいない」と言ってサンチャゴを喜ばせた。だが私からは「じいさんは一人だけど、じいさんを訳す人はたくさんいるんだ」と言うことにしよう。それでサンチャゴが喜んでくれることを願う。

二〇一四年八月

小川高義